

2. 2009年の事業ハイライト

- 2-1 in ミャンマー
- 2-2 in スーダン
- 2-3 in スリランカ
- 2-4 in パキスタン
- 2-5 in インドネシア

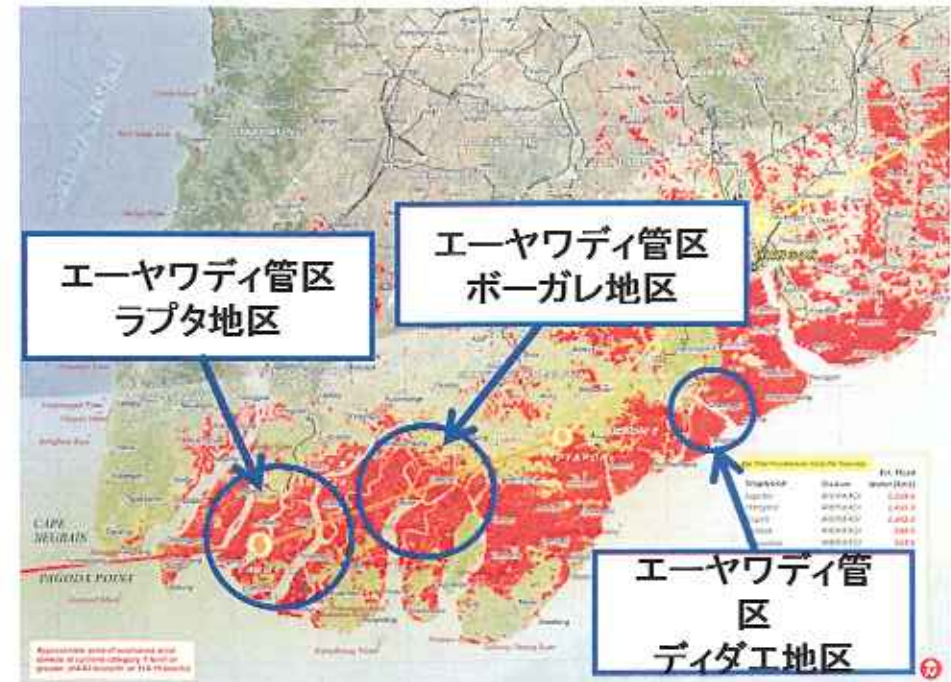


CHARITY BOOK PROGRAM



13万2000人の死者・行方不明者と240万人以上の被災者を出したサイクロン「ナルギス」の被害からの復興は全ての分野において十分ではありません(2009年末現在)。生活用具や仮設住宅など、最低限の支援は満たされつつありますが、サイクロンの運んだ海水による塩害により、生業である農業がうまくいかないなど、多くの人が仕事を失ったままです。

一方、2010年11月に予定される政府の総選挙が近づくとつれ、外国の支援団体に対する規制が強まり、国内での移動が更に制限されるなど、今後も厳しい状況が予想されます。



ジェンは、2009年、輸送インフラの未整備により支援が届かず、厳しい生活を送っていたヤンゴン南西部エーヤワディ管区より遠隔地の村に、ようやく住宅再建のための資材(シェルターキット)を届けることができました。その他、将来の自然災害に備えるために、村の人びとを対象とした防災訓練ワークショップやサイクロン耐性のある学校兼避難所の建設を行っています。



Chabo!
CHABO! PROJECT

事業ハイライト in ミャンマー / 住宅再建支援



人口1300万人を抱え、特に被害の大きい地域では95%以上の家屋が倒壊(政府発表)したエーヤワディー管区のデルタ地帯で、2008年の被災直後から全4,500世帯に対して住宅再建資材(シェルターキット)を配布しました。輸送インフラの未整備のため、全く支援の届かず厳しい生活を送っていた人びとは、お互いに協力しながら住宅を再建し、ようやく以前の生活を取り戻すための第一歩を踏み出し始めています。



海抜0メートルの
デルタ地帯



川沿いの木もなぎ倒されました



村と村の移動はボートで
数時間かかることも



再建中の家



骨組みまで再建できたところ



事業ハイライト in ミャンマー / 住宅再建支援



単純にサイクロン前の状態に戻すだけではなく、より安全に生活できる新しい技術を無理のないように紹介します。シェルター・キットは竹や木など村人に馴染みがある材料で作られており、村の人たちが簡単に建設・補修できます。2008年に実施した住宅再建事業を、よりニーズに合わせるために、一般的な住宅のサイズと生き残った家族の人数などを現地の人たちの意見を元に算出し、最終的にシェルターのサイズは15.7㎡に落ち着きました。現地の声に耳を傾け、村人たちの生活にストレスを与えることのない造りになるようにしています。



ヤンゴンなどの近代的な建物で使われている柱をバッテン状につなぎ合わせる方法を採用。さらに、壁を2重にし、柱の基礎部分をレンガと砂とセメントで固めることで、住宅は飛躍的に強くなりました。



サイクロン「ナルギス」以前に大きな自然災害に被災した経験がないため、人びとに「防災」や「減災」という概念はほとんどありませんでした。防災教育では、サイクロンをはじめとする自然災害発生時に安全に行動できるよう、日々の備え・避難方法等を身につけるための防災訓練ワークショップを実施。毎回、出席率が80%を超え、2村9,299人が参加しました。

STEP 1. 各村の防災委員会(日本での自治会のようなもの)の立ち上げ

委員会自らが村の防災計画を作成し、村の中に防災ノウハウを蓄積していくためのワークショップを行います。ジェンがプロジェクトを終了した後も、村で防災活動を自主的かつ継続的に行える体制づくりをサポートすることで効果の持続を目指します。



STEP 2. 防災ワークショップ(5日間)

- 1日目 一般的な防災の知識
- 2日目 前回の被災に関する振り返り(ナルギスの経験共有)
- 3日目 将来の防災と災害時の情報伝達(村を知る)
- 4日目 ハザードマップ(危険地帯と安全地帯を示す地図)の作成
- 5日目 避難訓練

STEP 3. 村固有の防災ハンドブックの作成

防災ワークショップは、ジェンが参加者へ一方的に防災知識や避難訓練を指導するものではありません。きっかけはジェンのファシリテーターが作りますが、そこから彼らの生活や習慣に合わせたものにしていくのは、村の人びと自身です。村人に積極的に参加してもらえれば、彼らからもさまざまなアイデアや伝統的な知恵も出てきます。

1日目 一般的な防災の知識の学習

自然災害についての現象・被害・避難方法について学びます。ほとんどの人が、防災や減災という言葉聞いたことがないため、まずはジェンが基本的な防災知識を講義します。



2日目 被災の振り返り(ナルギスの経験共有)

人びとにサイクロンの発生から避難生活までを思い返してもらいます。「何が事前にできるか?」「何が問題だったか?」「何が役に立ったか?」を住民自身が確認し、次の災害への対策をイメージします。辛い記憶を呼び起こす作業なので、心のケアの意味でも重要な、ファシリテーターの腕の見せどころ。楽しい雰囲気づくりをしながら進めます。

3日目 将来の防災と災害時の情報伝達(村を知る)

村の歴史を振り返り、今後どんなことを準備すればよいかを話し合います。村の地形と危険な箇所を確認したり、災害時に正しい情報を伝えることの難しさを、伝言ゲームなどを通して楽しく学びます。



村の地形を確認

ラジオを聞いて避難合図の訓練

4日目 ハザードマップの作成

村のハザードマップ作りと、村の年間行事カレンダー作りを行います。ハザードマップは、いくつかのグループに分かれて村を歩き、危険・安全な場所を探し、地図にして発表します。



5日目 避難訓練



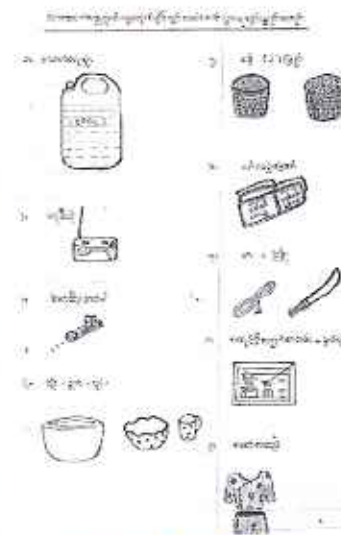
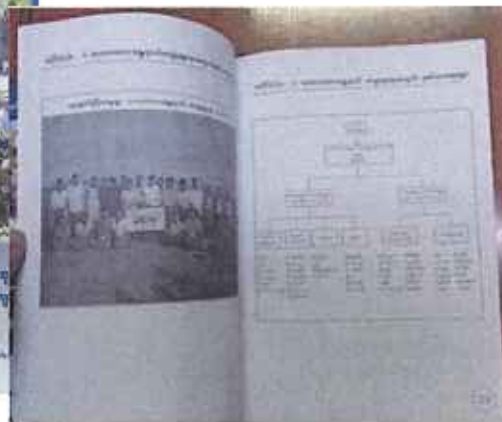
身体の不自由な人が先に避難。



浮輪と飲料用の水をタンクに入れて。

「防災ハンドブック」の作成

防災ワークショップの集大成として、ワークショップで学んだことや気づいたこと、決意したことをまとめた防災ハンドブックを作ります。一世帯につき一冊が配布されます。「なぜサイクロンが起きるのか」、「避難時に持っていくものをどう貯蓄していくか」、「長期的にどういう備えをしたら今後の災害による被害を最小限に抑えることができるのか」、について「彼らによる、彼らのための」ハンドブックを作成します。住民自身がハンドブックに愛着を持つことで、家族で防災について考える機会ができ、記憶が曖昧になることを防ぎます。



避難時の持ち物



ハザードマップ

内容は50ページのうち10ページが村によって異なります。防災委員会の写真と組織図(名前入り)、村の概略図(僧院や住宅や森など)、ハザードマップ、村の今後の計画と将来の村の予想図、村の歴史が各村ごとに書かれています。



事業ハイライト in ミャンマー



～小学校 兼 サイクロン用シェルターの建設中

被害が最も大きかったのにも関わらず支援の届いていなかったエヤワディ管区ボーガレ地区で実施。海拔0メートルのデルタ地帯にあるこの地域では、多くの人びとが「ナルギス」によって命を落としました。再びサイクロンに襲われたとしても、避難できる高台もありません。

現在、2つの村の小学校(2校)にて、サイクロンの再来に備えて、耐サイクロン性の構造をもった校舎、トイレと飲料水供給施設の再建を行っています。

- タヨーチャウ小学校(村の人口の7割2,027人が死亡)
- ゲエチャウンジー小学校(村の人口の4割600人が死亡)



一階部分は高い床で、2階が教室、屋上が避難場所になっています。



変化と効果

● 防災意識の高まり

防災ワークショップでは、各村ごとのコンテンツ(村の歴史の振り返り、将来計画の作成、村独自のハンドブック)を実施することにより、参加者にインセンティブを提供しないのにも関わらず、80%の参加率を維持しました。

噂を聞きつけた他の地区からの実施依頼もあります。防災もサイクロンの存在も知らなかった人びとは、今では将来に備えることで「悲劇は防げる」ことを知っています。

- 防災知識に関する事前/事後テストでは、**正解率 50%→80%**に。

(テスト内容)

- 災害発生時の避難場所
- 防災のための日ごろの準備
- 災害情報の収集方法 など

- ワークショップ後には、「将来のサイクロンに対して不安」が**0%**に。



一日ひと握りの米を貯蓄。大事なものと一緒に土に埋め、災害時に備えます。

● 住民の参加



「資材を運ぶ道がない。」

小学校兼避難所の建設のために村に訪れたジェンのエンジニアはそうつぶやきました。その声を聞き、翌週、ジェンが村を訪れる頃には、村びとが自主的に共同で作った道ができていました！建物の完成を心待ちにする村の人びとの参加を得て、今後どうやって建物を長く良い状態で使い続けられるかを協議しながら、建設を進めています。